

「思いや疑問，取り組みたいことを言え，
失敗を恐れず意欲を持って取り組もうとする生徒の育成」
～生徒自身が発する言葉と挑戦する気持ちを大切に作る作業学習のあり方～

仙台市立田子中学校 教諭 首藤雅浩

1 はじめに

(1) 研究主題設定の理由

震災直後の平成 23 年 4 月，私は本校に着任した。その年度に担当したのは，自閉症・情緒障害学級だった。生徒たちは，身辺処理や日常の大人との会話を行えたが，指示理解や協調性，根気強さや働こうとする気持ちに課題があったため，作業学習を通してそれらの力を育てたいと考えた。

そこで，平成 23 年度は「指示されたことを理解しその通りに行う」，「集中して根気強く働き続ける」，「完成の喜びを味わう」ことを大きなねらいとして，野菜作りと箱作りを行った。様々なことを考えながら取り組んだ作業学習では，指示理解，協力して行おうとする気持ち，集中力や根気強さなどに高まりが認められた。その一方，難度が低く単調な作業の繰り返しは集中力や意欲の低下を招いているにもかかわらず，生徒たちは誰も不満を訴えなかった。言われたことを黙々と続けることは，年度初めに私が願った姿である。しかし，「やりたくない」と言わずにただ黙々と作業を続けることが，本当に将来働くための力になるのだろうかという疑問を抱くようになった。

このことから，「思いや疑問，取り組みたいことを言え，失敗を恐れず意欲を持って取り組もうとする生徒の育成」に取り組んでみたいと考えた。

(2) 求める生徒像

私が作業学習で大切にしてきたことは，将来働くために必要な様々な力を高めることである。そのために，あいさつや返事はもちろん，指示されたことをその通りに行い，仕事を終えたら報告する。また，根気強く黙々と働き続ける力も必要である。だからといって，はじめから失敗体験をしてしまう作業学習では力が高まらない。そこで，教師の指導として目の前の生徒は何ができるか，どうやったらできるかを考察し，作業種目を決め，成功体験を積める工程を組み，完成までつながるようにしてきた。そして，他者から認められる機会も持つようにしてきた。

しかし，言われたことを黙々と続けるだけで，やりたくないとも言わず，作業に意欲を持たなくなった生徒たち。その姿には，作業学習のあり方をもう一度見つめ直さなければならないというメッセージが込められていると思うようになった。

そこで，次のような生徒像を考えてみた。

- ・自ら何でも言葉にできる生徒
- ・自己有能感と新たな課題に挑戦しようとする生徒
- ・働く意欲を持ち続ける生徒

2 研究の視点

作業学習は，知的障害のある生徒に教育を行う特別支援学校で行われている「領域・教

科を合わせた指導」の一つである。その目的は、「作業活動を学習活動の中心にしながら、児童生徒の働く意欲を培い、将来の職業生活や社会自立に必要な事柄を総合的に学習するものである」と学習指導要領解説にある。

これまでの作業学習において私は、将来働くために必要な力の育ちに力点を置いていた。しかし、平成 23 年の生徒の姿から、「言われた通りに行く」「黙って仕事をする」「ミスをしない」など「職場で働くとはこういうことだ」という既成概念にとらわれすぎていたと考えるようになった。

そこで平成 24 年から、意欲を高め持ち続けていくために、生徒自身が発する言葉と挑戦する気持ちを大切にする作業学習のあり方について考えていきたいと思った。

3 研究仮説

- ・言葉にする機会とその発し方を工夫すれば、自ら何でも言葉にできるようになるだろう。
- ・取り組みの段階を設定するとともに、自己決定や選択する機会を取り入れれば、自己有能感と新たな課題に挑戦しようとする気持ちが高まるであろう。
- ・言葉と挑戦する気持ちの成果である「意欲の好循環」を積み重ねていけば、働こうとする意欲が高まり、その意欲を持ち続けていくことができるであろう。

4 研究の内容

(1) 平成 24 年度の実践

平成 24 年度の特別支援学級は、自閉症・情緒障害学級に病虚弱と知的が加わり、3 学級となった。生徒たちは、身辺処理に課題のある生徒、細かな作業が難しい生徒、指示をしっかりと把握できない生徒、協調性に乏しい生徒など、個々の課題が多様化した。

年度はじめに各学級担任と話し合いをもって作業学習の必要性を確認し、可能な限り全員で取り組ませるように教育課程を編成した。週あたりの時数は 4 時間だった。

① 実践にあたって（「意欲の好循環 1」、平成 24 年度版）

研究仮説をもとに、平成 24 年度は図 1 のような流れを考えた。

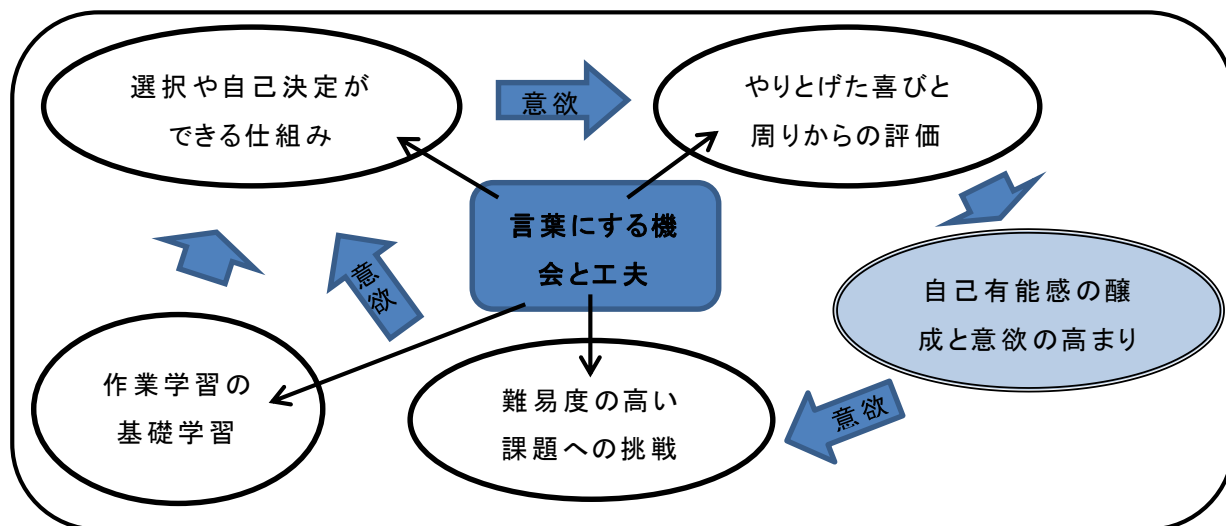


図 1 「意欲の好循環 1」

② 主な実践内容

ア) 言葉にする機会と工夫

・あいさつと返事

本校は、生徒会を中心に朝のあいさつ運動を行ったり、廊下でのあいさつを積極的に行ったりするなど、あいさつをすることに力を入れている。特別支援学級の生徒も朝のあいさつ運動(写真 1)に参加するが、その頻度は年数回で、通常の学級の生徒との交流が少ないこともあって、自発的にあいさつをするという習慣が身につけていない。



写真 1 朝のあいさつ運動

また、指示されたことを受け止めたかどうかを表現するために、大きな声で返事をしなければならない。しかし、小声であったり、うなづくだけであったりする生徒が多い。

そこで、あいさつや返事がとても大切であることやあいさつや返事の仕方について繰り返し伝えた。そして、大きな声で授業始まりと終わりのあいさつをすること、大きな声で相手の目を見ながら返事をするを「授業の約束」にした。

・困った時の S O S

指示されたことを受け止められない、分からなくなった、トラブルが発生した、トイレに行きたいなど、授業中に言いたくなることや言わなければならないことが生じるのは当たり前のことである。

ところが、そのことが言えずに作業が止まったり、ミスそのままにして次のことを行ったり、分からないために違ったことをしてしまうことがある。トラブルやミスを最小限にするには、S O Sをタイムリーに言えるかどうかである。

そこで、教師が机間巡視をしながら、困っている生徒の側にたたずみ、その生徒が自分から言えるような状況を作るようにした。教師がすぐ近くに寄る、教師が指で指す、肩をたたくなど、生徒によって状況作りの仕方を工夫した。

・願いや思い

自分の願いや思いを他者に伝えることの重要性が言われて久しい。それは、障害のある児童生徒にとっても同様である。しかし、23年度の作業学習には、その視点が欠落していた。そこで、「言葉を発する」活動を取り入れるようにした。教師に発するだけでなく、他の生徒の前で話す機会を多くした。また、様々な機会を活用して、言葉を発する状況や定型の話し方を設定した。

例えば、野菜作りでは 1.5メートル四方の区画を自分専用の畑にし、「マイ畑」として責任を持って野菜を育てることにした。何を植えるか、どんな作業が必要かを考え、みんなの前で発表した。また、考える過程で教師に「〇〇したいのですが、どうしたらいいですか」などの質問をしながら、自分の考えをまとめていった。

箱作りでは、自分が貼りたい箱や色紙を教師に言うようにした。前年度は、教師主導で箱や色を決めていたが、自分で選択するようにした。

切り絵でも、準備段階で「カッターを貸してください」、切り絵を始める際に「どこから切ったらいいですか」、切っている途中では「先生刃が折れました」「間違っって切ってしまいました」など、場面ごとに定型の言葉を使うようにした。

イ) 取り組みの段階の工夫と自己決定や選択する機会の取り入れ

・はじめはできること

どのようなことでも、初めてのことや難しいと感じられることには、取り組もうとする時に勇気が必要である。1年生にとっては作業学習自体が初めてのことであったし、2,3年生にとっても切り絵は初めて体験する作業種目であった。特に、切り絵は今までに使ったことのない道具を使わなければならない、生徒にとっても教師にとってもかなりハードルが高い作業種目であった。

そこで、それぞれの作業種目の工程を分析し、失敗しないために「今ある力でできること」から取り組ませるようにした。具体的には、野菜作りでは「ポットへの土入れと種まき」「苗植え」「水やり」「雑草取り」、切り絵では「のりつけ」「広い面の紙貼り」、切り絵では「直線切り」である。これらの内容でも、必要に応じて補助具を用意した。例えば、調理用の浅型バットと網を使ったのりつけ台や、刃の向きを間違えないように筆記矯正器具を利用したデザインカッター(写真2の下)である。



写真2 デザインカッター

・次はちょっとがんばってみよう

前述の内容を行える生徒には、次の課題として「少しがんばればできる内容」に取り組ませるようにした。具体的には、野菜作りでは「土おこし」、箱作りでは「狭い面ののりつけ」「ニス塗り」、切り絵では「模様」「簡単な絵」(写真3)などである。



写真3 簡単な絵

これらは、スコップやはけ、デザインカッターの特性を理解して作業しなければならない。言葉で説明することはもちろん、教師が手本を示したり一緒に行ったりして、失敗しないよう配慮した。

・どっちにする

マイ畑の場所をどこにするか、箱の色をどのようにするか、どの切り絵作品に取り組むかなど、自分で選択したり決めたりする機会を意図的に設定した。また、生徒が選択したり決めたりしたことを、尊重するようにした。

・失敗してもいいんだよ

平成23年度の作業学習で教師が行っていた内容が、箱作りの「角処理」だった。これは判断する力や巧緻性が求められる工程であり、失敗してしまう可能性が高いと考えたからである。また、切り絵では、より細かな切り方が求められる作品(写真4)は、失敗の可能性が高い。



写真4 難しい絵

しかし、取り組もうとする気持ちを大切にし、挑戦させることにした。

ウ) 「意欲の好循環」の積み重ね

上述のように、「言葉にする機会と工夫」と「取り組みの段階の工夫と自己決定や選択する機会の取り入れ」を作業学習に取り入れ、その過程や結果で一人一人が見せる姿を評価・賞賛するようにし、新たな課題への意欲付けを行った。

③ 対象生徒と作業種目・学習の内容の年間計画

対象生徒	1年6名（病弱1名，知的障害2名，自閉症情緒障害3名） 2年3名（自閉症情緒障害3名） 3年1名（自閉症情緒障害1名）			
	計10名(教職員は4名)			
作業種目と 学習の内容	月	野菜作り	箱作り	切り絵
	4	野菜の学習 「マイ畑」作り	作り方の説明 下貼り	
	5	苗植え 小学校へプレゼント	下貼り 下貼り	
	6	水やり・雑草取り	本貼り	
	7	野菜収穫	本貼り・ニス塗り	
	8	じゃがいも収穫	ニス塗り	
	9	野菜収穫・販売	田子中発表会で販売	切り絵について
	10	さつまいも収穫		デザインカッター
	11	雑草取り		切り絵トレーニング
	12, 1			切り絵トレーニング
	2, 3	土おこし		切り絵

④ 平成24年度の成果

ア) 言葉にする機会と工夫

・年度初めは大きな声を出せない，声をかけられてから返事をするなど，あいさつや返事に消極的な姿が目立ったが，行い方やその大切さを理解するようになった。また，全員で声を合わせたり友だちよりも大きな声を出したりすることの良さを感じられるようになり，促されなくても行うようになってきた。

・きっかけがあると教師に助けを求める生徒が増え，困った時にはすぐにSOSを出していいんだという気持ちが芽生えてきたと感じられた。しかし，教師が近づかないとSOSを出せない生徒も多く，状況作りは年度末まで継続した。

・育てた野菜苗を出身小学校へ贈った時に，どの生徒も胸を張り「ぼくが育てました」と言って，小学生から「これは何」と質問されると，自信をもって答えた。

・箱作りでは，「この箱どうですか」，「何色がいい」，「こっちがいいんじゃない」などと教師に質問したり，級友同士で話したりする場面が増えた。

・様々な機会を活用して，言葉を発する状況や定型の話し方を設定したところ，少しずつではあるが自分の思いを話すことができるようになった。しかし，様々な状況に応じた自分なりの表現をすることは難しく，次年度への課題とされた。

イ) 取り組みの段階の工夫と自己決定や選択する機会の取り入れ

・「今ある力でできる」や「補助具の活用」という取り組みを通し，不安なく作業学習に取

り組む姿が見られた。これは以前から大切にしてきた視点だが、作業学習や初めての作業種目に取り組む際に重要な視点だと再認識した。

・「次はちょっとがんばってみよう」という取り組みを通して、ほとんどの生徒が、個々の作業工程や作品作りを自分の力で行えるようになり、作業に対する見通しと自信をもてるようになった。この成功経験を通して、もう少し難しいことに挑戦してもいいという気持ちをもてるようになった。

・自分で決める、作品を選ぶという取り組みを増やしたところ、挑戦しようとする気持ちが高まり、かなり難しい作品に取り組む生徒が増えた。一方で、自分の技術では成功しない作品に取り組む生徒もいて、失敗を繰り返してしまう結果となった。

ウ)「意欲の好循環」の積み重ね

言葉にする喜びやできた喜び、たとえ失敗しても挑戦した気持ちなど、自分が行ったことについて、教師からよい点を評価され、だんだんと自信が芽生えてきたと思われる。また、その経験を積み重ねてきた結果、より大きな声で発しよう、よりよく作ろう、また挑戦しようというように、自分を高めていこうとする姿も見られるようになった。

(2) 平成 25 年度の実践

平成 24 年度の取り組みを振り返り、あいさつや返事、できることやちょっとできることに取り組むことは成果が確認でき、研究仮説の方向性は妥当と考えた。しかし、SOS や思いの表現、新たなことへの挑戦については、次のような課題が明らかになった。

- ・教師が近づけばSOSを発するが、それまで待っている生徒
 - ・決まった表現を、その場面でしか言えない生徒
 - ・失敗は当たり前だが、自分でできることからかけ離れている作品に取り組む生徒
- これらの課題を踏まえ、平成 25 年度の作業学習を検討することになった。

平成 25 年度の特別支援学級は、肢体不自由学級が加わった。生徒の増加と個々の課題の多様化のため、作業学習の内容の検討も必要となった。

① 実践にあたって（「意欲の好循環 2」、平成 25 年度版）

平成 24 年度を踏襲しながら、新たな課題を解決する視点が必要と考えた。それは、

- ・教師が近くにいなくても思いを伝えるためのきっかけづくり
- ・定型の表現だけでなく、様々な表現を用いるための取り組み
- ・失敗を恐れずに挑戦して欲しいが、失敗ばかりでは自信につながらない。自信をもてる作品作りをするための選択の仕方

である。これら「きっかけ」「様々な表現」「選択の仕方」を新たな視点として取り入れ、図 2「意欲の好循環 2」を描いた。

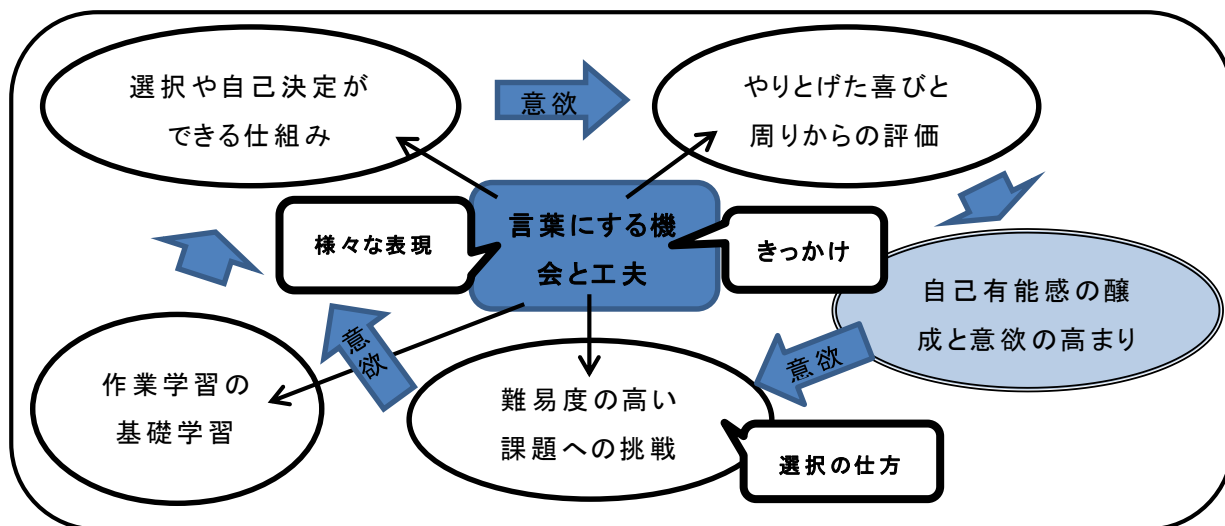


図 2 「意欲の好循環 2」

② 主な実践内容

ア) 言葉にする機会と工夫

・あいさつと返事

あいさつと返事を大切にすることを継続した。また、それらに加え、報告についてもその仕方を伝え、行うようにした。

あいさつや返事が大切であるということは、教師からだけでなく 2, 3 年生から 1 年生へ伝えてもらうようにもした。

・困った時の SOS【きっかけづくり】

SOSを言うきっかけがつかめない生徒がいることから、「SOSカード」(写真 5)を作り、全員に配った。使う必要がない生徒もいるが、全員に配ることによって「誰でも使っていていい」という安心感が得られると考えたからである。



写真 5 SOSカード

・願いや思い【様々な表現】

表現するという事は難しく、前年度は「定型の表現を特定の場面で言える」ことを成長ととらえた。しかし、これから生きていく上で、いつも決まったパターンがあるわけではない。そこで、定型の表現を大切にしながらも、教師が様々な表現で投げかけながら、言葉のやりとりを行うようにした。

また、他教科においても質問されたことに答える機会を多く設定し、大人のを借りずに自分で考えて表現するようにした。どう表現したらよいか分からなくなった場合は、SOSカードを使うようにしたり、自分から発するのを待つようにしたりした。

イ) 取り組みの段階の工夫と自己決定や選択する機会の取り入れ

・はじめはできること&次はちょっとがんばってみよう

前年度の取り組みを踏襲し、1 年生に作業学習の流れを理解させようと考えた。野菜作りと箱作りの作業は行なえるようになったものの、4 名のうち 2 名は切り絵を続けることができなかった。できることを検討し、補助具を工夫するなどしたが、切り絵を行

うことが難しいと判断せざるを得なかった。そのため、年度途中から作業学習を行う教室を2つに分け、新たな作業種目としてビーズ細工を取り入れた。

・ **どれにする&失敗してもいいんだよ【選択の仕方】**

失敗してもいいとは言うものの、失敗続きでは自信をもてなくなってしまう。そこで、取り組む作品に段階を設定し、その段階をクリアしたら次へ進むことができるという流れにした。段階の設定は教師の主観によるが、各段階で選択できる作品の種類を複数にすることによって、生徒の取り組み意欲を維持しようと考えた。

ウ) 「意欲の好循環」の積み重ね

平成24年度同様、一人一人が見せる姿を評価・賞賛するようにし、新たな課題への意欲付けを継続した。

③ 対象生徒と作業種目・学習の内容の年間計画

対象生徒	1年4名（肢体不自由1名，知的障害1名，自閉症情緒障害2名） 2年6名（病弱1名，知的障害2名，自閉症情緒障害3名） 3年4名（知的障害1名，自閉症情緒障害3名） 計14名（教職員は5名）			
作業種目と学習の内容	月	野菜作り(全員)	箱作り(全員) ビーズ細工(2名)	切り絵(12名)
	4	野菜の学習 芋畑作り	箱作り 下貼り	
	5	苗植え 小学校へプレゼント	下貼り 本貼り	
	6	水やり・雑草取り	本貼り	
	7	野菜収穫	本貼り・ニス塗り	切り絵について
	8	じゃがいも収穫	ニス塗り	カッタートレーニング
	9	収穫・販売・雑草取り	田子中発表会で販売	切り絵
	10	さつまいも収穫		切り絵
	11	雑草取り	ビーズ細工	切り絵
	12, 1		ビーズ細工	切り絵
	2, 3	土おこし	ビーズ細工	切り絵

④ 平成25年度の成果

ア) 言葉にする機会と工夫

- ・先輩があいさつや返事の大切さを伝えたところ、後輩たちは早くできるようになった。
- ・教師が近くにいなくてもカードを掲げ、自分の困りごとを発言できるようになった。
- ・少しずつだが自分なりの表現で発することができるようになってきた。しかし、自分の思いを正しく伝える表現の仕方については、どこまでできればいいのかという基準が不明瞭であり、今後も継続した取り組みが必要であると思われる。

イ) 取り組みの段階の工夫と自己決定や選択する機会の取り入れ

- ・切り絵を行うことが難しいと判断した2名の生徒は、ビーズ細工で力を発揮し、たくさんの作品を作ることができた。

- ・取り組みの段階を設定することで失敗経験が少なくなった。
- ・選択できる作品の種類を多くしたことで、十分ではないものの「したい」という気持ちを維持できた。それは、生徒たちが「この作品をクリアできれば、やりたい作品に取り組める」という気持ちを持ち続けてくれているからだと考える。

ウ)「意欲の好循環」の積み重ね

言葉にすることや挑戦することの大切さに気づき、互いに言葉を交わしたり評価したり、競い合ったりする姿が多く見られるようになった。作業学習だけでなく、普段の生活でも同様の成果が見られる。

意欲の積み重ねから、集中力や持続力はもちろん、次の作業学習の時間を心待ちにする、授業変更で作業学習ができないと落胆する姿も見られるようになった。

5 成果と課題

平成 23 年度の取り組みを教訓に、「思いや疑問、取り組みたいことを言え、失敗を恐れず意欲を持って取り組もうとする生徒」を育てたいと考え、平成 24 年度から作業学習に取り組んできた。この 2 年間の取り組みから得られた成果と課題についてまとめてみたい。

(1) 成果

ア) 言葉にする機会と工夫

- ・あいさつや返事だけでなく、願いや思い、困ったことを言葉にすることの大切さに気づき、ほとんどの生徒が大きな声で発言する、定型の言葉で発言するようになった。また、平成 24 年度は教師がきっかけを作って言葉のやりとりを行ったり、自分から発するのを待つようにしたりした。その結果、自分がしたいこと、したくないこと、どのようにしたいのかなど、自分なりの表現で発言できるようになってきた。
- ・返事や報告を忘れていた後輩に対して、助言する先輩が見られるようになった。
- ・状況作りやカードを使用した結果、作業学習だけでなくどの授業でも困った時には手を上げたり、SOSカードを掲げたりするようになった。困った時や分からない時には、遠慮せずに声に出して良いと考えるようになってきたと思われる。

イ) 取り組みの段階の工夫と自己決定や選択する機会の取り入れ

- ・選択や自己決定、失敗を恐れずに挑戦するといった視点を取り入れた作業学習を行った。しかし、失敗続きでは意欲が高まらない。そこで、「いまある力でする」、「少しがんばってする」、「失敗を恐れずにする」という段階や選択の仕方を工夫した。その結果、難しい作業工程や作品に取り組もうとする生徒が増えたことはもちろん、上手にできるようにもなり、それぞれの工程を任せられるようになった。
- ・選択する、決定することを大切にしてきた。その結果、自分の取り組み作品を大切に扱おうとする気持ち、集中して取り組もうとする気持ちが高まってきた。
- ・失敗しようとも挑戦する気持ち大切だと繰り返し伝えてきた。その結果、作業学習だけでなく、学校生活全般に積極的な姿が見られるようになった。
- ・「今ある力でできる」や「補助具の活用」という取り組みを通して、不安なく作業学習に取り組む姿が見られた。これは以前から大切にしてきた視点であるが、作業学習や初

めての作業種目に取り組む際に重要な視点だと再認識した。

・「次はちょっとがんばってみよう」という取り組みを通して、ほとんどの生徒が個々の作業工程や作品作りを自分の力で行えるようになり、作業に対する見通しと自信をもてるようになった。この成功経験を通して、もう少し難しいことに挑戦してもいいという気持ちをもてるようになった。

ウ)「意欲の好循環」の積み重ね

言葉にする喜びやできた喜び、たとえ失敗しても挑戦した気持ちなど、自分が行ったことについて、教師や級友からよい点を評価され、自信が芽生えてきた。また、その経験を積み重ねてきた結果、より大きな声で発しよう、よりよく作ろう、また挑戦しようというように、自分を高めていこうとする姿も見られるようになった。

(2) 課題

ア) 言葉にする機会と工夫

・自分なりの言い方で言葉にしようとする生徒が増えてきているが、様々な場面で適切な発言ができていないわけではない。言葉は相手や状況に応じて使い分けなければならない。相手の気持ちやその場の状況を把握することが難しい生徒が多いため、作業学習という限定された場からその他の場面へ、どのように汎化していくかが今後の課題である。

イ) 取り組みの段階の工夫と自己決定や選択する機会の取り入れ

・挑戦しようとする気持ちや積極性が高まり、作業学習を心待ちにする生徒も多くなった。意欲の高まりが感じられる一方、早く次の作品に取り組みたいという気持ちが強いために失敗を繰り返してしまう生徒がいる。今行っている作品の完成まで、ていねいに作業を進めていく力をつけていかなければならない。

6 今後の取り組み

生徒たちは、言葉の大切さを理解し、何でも積極的に発言しようとするようになった。また、難しい作品に挑戦しようとする気持ちや集中力が高まるなど、積極性の高まりを確認できた。それ以上に、「意欲の好循環」を核にすることで、作業学習を心待ちにする姿、作品の完成を笑顔で報告する姿が数多く見られるようになったことが、私にとって一番の喜びである。

解決しなければならない課題はあるものの、2年間の取り組みから得られた成果は大きく、今後もこの視点を大切にしながら実践を続けていけたらと考えている。

参考文献・資料

「特別支援学校学習指導要領解説」、文部科学省、2009

「平成26年度版仙台市の特別支援教育」、仙台市教育委員会編、2014

「特別支援教育 作業学習ハンドブック」、広島県教育委員会編、2011